

弔電には「御冥福を祈る、安らかに眠り下さい」等は使いません

2010/1/7初版

Q:弔電には「御冥福を祈る、安らかに眠り下さい」はなぜ使ってはいけないのでしょうか。また、弔電を読み上げる上でどんな配慮が必要でしょうか。

A:浄土真宗のご法義に矛盾するからです。弔電を読み上げるに際しては、これに替わる文例を用います。尚、弔電発信者が弔問に見える場合には、喪主を通じて事前に文面配慮の趣旨を伝えておくようにします。

ご弔電の文面は、NTTの弔電文面礼の影響もあってか決まり文句が登場します。これらは浄土真宗のご法義に違背するものが少なくありません。

例を挙げますと

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

安らかに永眠されますようお祈りします(安らかに眠りください)。等々です。

これらは、浄土真宗のご法義に違背し、お同行のご葬儀に際しては相応しくありません。

「お悔やみ申し上げます」もどちらかといえば、相応しいとは見ません。

なぜなら、浄土真宗で他力の信心を戴いた念仏者は、阿弥陀如来の本願力によって、浄土往生するや否や成仏し、迷いの世界に向かって働き出して下さるからです。

詳しく見てみますと

浄土真宗では、阿弥陀如来の本願力によって浄土往生し(往相回向)、往生するや否や成仏して阿弥陀如来のお徳と同じお徳を頂戴します(往生即成仏)。

これは阿弥陀如来の本願によって建立されたお浄土の土徳に基づきます。

そうすると、お名号の働きと一体となって迷いの世の衆生救済に向って直ちに働きだして下さる(還相回向)からです。

決して、お浄土に逝って安閑として眠りにつくと云う世間の一般的な理解ではないのです。

では、どうすればよいのでしょうか。

葬儀屋さん任せにしておくと、上記のような文面がそのまま読み上げられてしまいますので、事前にチェックをして、浄土真宗のご法義に照らして矛盾がないような表現に改めて読み上げるのがよいのです。折角の機会ですから、葬儀当日ご参列の弔問者にもそのお心が伝えられるに相応しい文面を選ぶようにします。

当院が導師をお引き受けするときは、元の文面を尊重しつつも、肝心なところは、次の文面に置き換えて読み上げるように配慮しております。

A案「ご尊父(ご母堂)様のご逝去の報に接し謹んで哀悼の誠を表します。たとえひとたびは、別離の悲しみに遇うとも、俱会一处(くえいっしょ)のご本願に乗託して、如来様のお膝元での再会の日を待ち望む次第でございます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

B案「ご尊父(ご母堂)様のご訃報に接し心から哀悼の誠を表します。この悲しみを機縁として無量寿如来のご本願の思し召しに目覚め、念仏してしばしの別れとさせて戴きます。南無阿

仏事のQ & A 「弔電には「御冥福を祈る、安らかに眠り下さい」は使いません」

弥陀仏、南無阿弥陀仏」

C案「御尊父様の御訃報に接し衷心より哀悼の誠を捧げます、この度のお別れを機縁に、共々に念仏して如来大悲のお喚(よ)び声に目覚めて、今生の白道(びやくどう)を歩ませて戴き、浄土での再会を待ち望む次第でございます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。」

尚、文面配慮に当たっては、当日、弔電を御打ち戴いた方やその関係者が弔問に見える場合を想定して、予め喪主を通じて、弔電の文面を浄土真宗の習いに則して配慮させて戴いたとお伝えし御同意を得るようであれば申し分がありません。

更に一步進めれば、宗門からNTTに対して浄土真宗での弔電文例を掲載して戴けるよう働きかけて戴くこととなります。

また、御本山からは末寺に対してその案内をすると同時に、併せてお東さんの御本山にも同様の呼びかけをして末寺での足並みが揃うようにご配慮を戴きたいところです。合掌

(玄宥記)